

平成三十年度 芸術鑑賞感想文 古典芸能鑑賞（狂言・和芸・落語）

株式会社 わちやわちや

三年生 KSさん

私は今回初めて日本の伝統芸能狂言・和芸・落語というものを鑑賞してとても感動しました。

まず最初の狂言ですが日本古来の古い文化という重苦しいイメージがあり、あまり理解できないものという思いが強かったのですが、今回の演目は初心者にも分かりやすくその

お陰で今までのイメージは払拭されました。また、能と狂言の違いも解説されていたのでより分かりやすく理解でき、日本文化の歴史の深さを感じました。その上、小道具が少なく自然界の音やノコギリを切る音など細かな音までも声で忠実に再現されていることにとっても驚いたのと、場面転換も舞台を一周回ることなどとても興味深かったです。

す。あとドロボーの話がとても面白かったです。

次の和芸では、太鼓などをを使った演出がとても面白くてつい笑ってしまう場面がありました。あごを使って長机を持ち上げているのを見てとても凄いいと思いました。

最後の落語ですが、今日の落語を聞いていて、私は笑いが止まりませんでした。最初は落語って堅苦しいものかなと思いましたが、見ていていつの間にか落語の世界に引き込まれていました。日本語は少しの工夫をすることでたくさ



んの面白さが出るのだと思いました。何よりも出演されていた方のその場に合った言葉の使い方や日本語の美しさをいっそう高めているのではないかと思います。

三年生 NMさん

私は以前に落語は聞いたことがあったのですが狂言や話芸は初めて聞き、今回凄く良い体験が出来ました。狂言は昔の言葉で語られるので、とても理解するのが難しかったです。今まで狂言という文化が、形だけでなく言葉もそのまま受け継がれてきたというのには凄いいと思いました。狂言の説明の中で「演技をする人が笑顔であること」と言っていました。それは普段の生活の何気ない場面でもあると思います。そういった部分に今も昔も変わらない人間らしさがあり、だからこそ今にも続く芸能なのだと思身感することが出来ました。

一方、落語では説明によって改めて落語への理解が深まりました。一人で二役をしていましたが、場面の移り変わりや親子の会話の中にその話術が生かされ、聞いていて楽しくまたなるほどと納得もしていました。私が以前に聞いた落語とは違う雰囲気だったので、人によってこんなに変わるのだということにも気づくことが出来ました。

今回の芸術鑑賞を通して、日本芸

能のレベルの高さを知りました。そして使われている言葉や、一つ一つの動作がとても深い意味をもっていることにも気づくことが出来ました。この日本芸能がオペラのように世界に知れ渡り、世界中の方々に日本の文化を知ってもらいたいです。

三年生 MKさん

今回は伝統芸能がテーマということで狂言、大道芸、落語と多く学べることがありました。私が見て感じたことは、芸の見せ方とその時に応じた対応に目がいきましました。その時に応じた対応というのは平たく言えばアドリブと言われるものだと思います。例えば大道芸のともさんですが、お客さんとの掛け合いや、体験で一人余った人へのフォロー。また落語家の方は小森先生の勘違いなどを笑いに変えたりと、とにかくその対応がとても素晴らしかったです。

次に見せる事ですが、やはり古くからの芸能で時にシンプルですが奥深いものもありました。しかし言葉だけでは分かりにくいものもありましたが、それでもなにか感覚で分かる事も多くありました。もしこれらただただ語るだけなら何も何百年も続いているなかつたと思います。今回、狂言を見て本当にそう感じました。

私はこれでも音楽をやっています。ライブで司会や曲の合間の小話をする必要があります。少し意味は



違いますが人を引きつける話し方というものを学ぶことが出来ました。また、話し方と言えば一人で何役もする事が出来る落語でしょう。一人の声なのにそこに何人もいるようなそんな想像をする、させる、人の想像力をかき立てる文化というのが伝統的な日本の文化だと思いました。

二年生 OKさん

今年度の芸術鑑賞特集では「古典芸能」を鑑賞しました。私は古典芸能に触れたことが少なく、堅苦しく難しいものというイメージがあり、あまり興味が持てませんでした。しかし今回「古典芸能」を鑑賞し、そのイメージが大きく変わりました。

今回の古典芸能は狂言からでした。狂言は、一度も目の前で見たことがなく理解できるか不安でしたが、解説をしながら演じて下さったので分かりやすかったです。また、言葉遣いの中に古典の授業で習った文法があると、授業とのつながりが見え、より楽しめました。

次に和芸では、後ろからの登場や机を持ち上げるなどインパクトのある演出に加え、場を盛り上げる口調に惹きつけられました。

最後は落語でした。落語家さんが落語は頭の中で想像した絵が面白いほど面白いと言ったのを聞き、落語の映像の無い単調なイメージが、一つの話から人それぞれ想像するものが違い面白い点が違うという良さに気付くことが出来ました。また落語の仕草や口調のみで面白さを伝えることから、少しの変化、工夫で人を笑顔に出来ることや、一つの日本語がたくさんの意味を持つからこそ面白さがあることに気付きました。

今回古典芸能に初めて触れて良さや面白さに気付くことがたくさんありました。「古典芸能」には、それぞれ違う良さがあり奥が深いと思いました。イメージだけで敬遠するのではなく何事も興味を持って触れてみるのが大切だと思いました。

二年生 KNさん

今日は日本の伝統文化に触れるため狂言、和芸、落語といった三分野をそれぞれ初めて生で見ることができました。一つ目の狂言は昔NHKのテレビでやってるのを少し見たことがあったくらいで全く親しみもなく、何を言っておられるのか全然分かりませんでした。でも狂言の方が分かりやすく説明をして下さ

り、舞台を一周回ることでも場面が変わること、舞台道具が無いので扇一つで表すことなどたくさんの初めて知れたことがありました。今でいうお笑いが昔の狂言だったと思うと日本もいろいろと進化したなと思います。自分は今しか知らないからお笑いの人が面白いと思うけれど、昔の人が今のお笑いを見ても面白いとはならないんだらうなと思います。時代に合ったお笑いをしていくことで皆が笑顔になるんだらうなとも思いました。

二つ目の和芸師の通称ともちゃん はユーモアあふれる方でした。面白さがあり、技の実力もありすごい方だと思いました。少しの時間で近江高校生をくぎ付けにしたともちゃんには驚きました。

三つ目の落語はだじやれのようなもので昔からだじやれで人を笑わす風習があったんだなと思いました。この三つの日本伝統芸能を見て三つとも共通していることがありました。それは見ている人、おこなっている人が笑顔になることです。見る人はもちろん、おこなっている人は意識的にも知れないけど笑顔で人を笑顔にする芸がある日本の風習は素晴らしいことだと思います。これからも無くなること無く、いい日本の伝統をつぐ人がいてくれたらいいなと思いました。

一年生 KAさん

私はテレビで狂言や落語などを見たことはあるけれど実際にこの目で見るのは初めてでした。正直最初は日本の伝統芸能は昔の言葉を使っているの、自分で内容を理解することが難しいから面白くなさそうだなと思っていました。でも細かく説明が入っていて分かりやすかったし、特に、落語が一番面白いと思いました。

落語は話の中にダジャレを入れていたりして面白いし、映像が無いので個々でどんな場面かを想像するの、人それぞれ思い浮かべるものが違うから、そういうところが落語の魅力なんだということがわかりました。また、私はそばをすする音を表現しているのがすごいと思いました。本当にすすっているかのような音だし、最後のネギを食べているところと音を使い分けているので、とても本物のように感じました。しかし、狂言ではのこぎりを使う音などありましたが、今私たちが表現する音とは違うなと思いました。狂言では「ズカズカズカリ」と表現されていたのですが、今では「ギョギョ」などと表現します。狂言の方が強そうな感じがしますが、同じものでも昔の人と今の人では音の感じ方が違うのだなと思いました。

また、体験できるコーナーで先生が落語をしていたのが面白かったです。普段はとても怖い先生だと思っ

ていたけれど、ボケたりして、あんなことをする先生だと思いませんでした。最高に面白かったです。

私は芸術鑑賞がなければ日本の伝統芸能にふれる機会がなかったので良い経験になりました。自分たちの世代は新しいものが好きで、良き古い伝統に目を向けなくなるので、一番伝統をつなげていくことが難しいと思います。しかし、私は自分の子どもの世代にその良さを伝えて、後世にしっかりとつなげ、みんなにもっと親しまれたら良いなと思いました。

一年生 KNさん

普段は触れる機会のない古典芸能を実際に観ることが出来ました。特に興味があったのは落語でしたが、この日は狂言や和芸の魅力を知ることができたので嬉しく思いました。特に狂言については、文化の差異が大きく分からない親しみにくいなどのイメージが覆りました。

私が驚いたのはその舞台装置の少なさです。小道具も多くはなかったことにも想像力をかき立てられました。そのため、舞台を一周したら場面転換など、さまざまな工夫がされていて、つい見入ってしまいました。また言葉遣いの違いから話が分かりにくかったり、筋を見失ったりしました。しかし現代のものよりもストーリーやオチが分かりやすいこと

にも助けられました。部屋を歩き回る場面では、背景のセットがないからこそ話がスムーズに流れたのだと思います。現代のリアリティがあり壮大で細かな舞台装置も素敵ですが、おそらく舞台上に二部屋つくらなければかなわないと思います。舞台いっぱい展開する演出は狂言でしか出来ないもので、それを最大に活かした脚本に感動しました。

それらの理由に加え、舞台装置がないことが手軽さにつながり、気に入っていたという秀吉などの位の高い人も自らできることも現代まで続いていることの理由になっていると思います。それがなければ位の高い人々は観る側にとどまっていたのではないかと思いました。だから狂言は残るべき理由があつて残ったのだと思います。

